

# 要旨

## I. 目的

本研究の目的は、脳卒中による片麻痺のある独居高齢者が退院後の排泄動作を獲得するまでのプロセスを記述することである。

## II. 方法

本研究は脳卒中による片麻痺のある独居高齢者に対して、半構成的インタビューを行う質的帰納的研究である。対象者は、主病名として脳卒中の診断を受け、脳卒中初発で入院し、自宅退院後3年以内の片麻痺がある65歳以上の者で、独居、もしくは家族が同居しているが、日中は家族が不在となり実質的に独居状態になる時間があり、インタビューの時点で自宅での排泄動作が実施できている6名であった。平成29年7月から平成29年11月末日までの期間にデータ収集を行い、1人の対象者に対して1回60分程度のインタビューを行った。インタビューデータは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。なお、本研究は聖路加国際大学の研究倫理審査委員会(承認番号:17-A018)の承認を受け実施した。

## III. 結果

インタビュー内容の分析より、6個のカテゴリーと16個の概念が抽出された。カテゴリーのうち【やりながら自分なりの排泄動作を考える】と【自分なりの排泄動作のゴールを見極める】の2つをコアカテゴリーに選定した。脳卒中による片麻痺のある独居高齢者は【病院のケアを受け入れる】という受動的な存在から、【やるしかない状況で成功体験を得る】という経験を経て、【やりながら自分なりの排泄動作を考える】【自分なりの排泄動作のゴールの見極める】というサイクルを形成し、能動的な存在へと変化していた。その変化の中で、【自分の身体と対話する】ことで麻痺と加齢変化による身体状況を了解し、【他者と支援関係を結ぶ】ことで周囲の人々との支援関係を構築し、自分なりの排泄動作を獲得していた。

## IV. 結論

脳卒中による片麻痺のある独居高齢者が退院後の排泄動作を獲得するプロセスは、やりながら自分なりの排泄動作を考えることと、自分なりの排泄動作のゴールの見極めることを繰り返し、能動的な存在として排泄動作を獲得するプロセスであった。本研究を通して自身の病棟での経験を振り返る事で、発症急性期には、医療者主導の排泄ケアから患者主導の排泄支援(本人が排泄出来たと思える援助)に切り替えるタイミングを見逃さないこと、退院後に試行錯誤を重ねる中で自分なりの排泄動作を獲得できる存在だと患者を認識し、入院早期から自宅の環境に戻ることを支援すること、患者が自主的に排泄動作を試してみても大丈夫だと思える環境を整え、その試みの動作が上手くいくかどうかを詳細に見守ること、自主的な行動から排泄に関わる動作が達成出来た時には共にその達成を肯定し、排泄動作の再獲得に向けて前進していると本人が思える関わりを持つこと、排泄動作の具体的な方法を専門家として患者に押し付ける態度ではなく、多様な選択肢を提案することの必要性が示唆された。